## 表-10 液状化判定手法一覧表

<b>双一10                                    </b>						
指針·基準名	液状化判定の対 象とすべき土層	液状化の判定方法	液状化強度の求め方	地震外力の求め方	構造物への影響の評価	
共同溝設計指針	以下の3つの条件 を満足する土層	●液状化に対する抵抗 率F」を求め、この値が	液状化強度(動的せん断応力比) $R$ は次式によって求める。 $R=R_1+R_2$	地震時せん断応力比Lは次式によって求 める。	計算されたF <sub>L</sub> 値より共同溝底面における過剰間隙水圧を求め、共同溝の 浮き上がりに対する検討を行う。	
	地盤面から10m以内にあるN値が30以下の沖積層 ②現地盤面から20m以内の飽和砂質土層 ③平均粒径Dmが	$F_L = \frac{R}{L}$ ここに、 R:動的せん断強度比 L:地震時せん断応力比 $ullet$	$R_1$ は $N$ 値と有効上載圧 $\sigma'_{v}$ の関数で表される動的せん断強度比の第1項で次式で表される。 $R_1 = 0.0882 \sqrt{\frac{N}{\sigma'_{v}+0.7}}$ ここに、 N: $N$	$L = r_d \cdot k_s \cdot \frac{\sigma_v}{\sigma_v'}$ ここに、 $r_d$ : 地震時せん断応力比の深さ方向の低減係数 (=1-0.015z, zl $t$ メートル単位で表した地表 からの深さ) $k_s$ : 液状化判定に用いる地表面での水平震度 $\sigma_v$ : 全上載圧( $k$ g $f$ /cm²) $\sigma'_v$ : 有効上載圧( $k$ g $f$ /cm²) 液状化判定のための地表面水平震度 $k_s$ は次式により求める。 $k_s = v_1 \cdot v_2 \cdot v_3 \cdot k_{s0}$ ここに、 $K_{s0}$ : 標準水平震度 (=0.15) $\nu_1$ : 地域別補正係数 $n_s$ $n$	$F_S = rac{W_S + W_B + Q_S + Q_B}{U_S + U_D}$ ここに、 $W_s$ :上載土の荷重(水の重量を含む)( $t/m$ ) $W_s$ :共同溝の自重(収容物件及び捨てコンの重量を含む)( $t/m$ ) $Q_s$ :上載土のせん断抵抗( $t/m$ ) $Q_s$ :共同溝底面に作用する静水圧による揚圧力( $t/m$ ) $U_s$ :共同溝底面に作用する過剰間隙水圧による揚圧力( $t/m$ ) $U_p$ :共同溝底面に作用する過剰間隙水圧による揚圧力( $t/m$ ) 地盤の液状化発生の可能性が高く、浮き上がりに対する安全率が1.1未満となり、共同溝に変状の発生が予測される場合には、適切な対策を講じるものとする。    **********************************	
			R₁とR₂の和で表される液状化強度Rを式で表すと次のようになる。	ν <sub>3</sub> : 重要度別補止係数(=1.0)		
			$R = 0.0882 \sqrt{rac{N}{\sigma_{ m v}' + 0.7}} + 0.19$	凡 何 [: A [: B : C		
対象構造物			$R = 0.0882 \sqrt{rac{N}{\sigma_{v}' + 0.7}} + 0.225 log_{10} rac{0.35}{D_{50}}$		No. of the state o	
RC共同溝			$0.6$ mm $\le$ $D_{80} \le 2.0$ mmの場合 $R = 0.0882 \sqrt{\frac{N}{\sigma_V' + 0.7}} - 0.05$		田田 恵木	

図-2 地域区分